

〔短 報〕

産褥早期の授乳場面における母親の発話

前原 邦江*

Maternal speech during feeding in the early postpartum period

Kunie MAEHARA*

要 旨

本研究の目的は、産褥早期における母親の発話の内容を明らかにし、発話数と内容の経日的変化について事例検討を行うことである。初産で経膈分娩をした日本人褥婦とその新生児10組を対象に、分娩後入院中（産褥1～6日）の授乳場面の参加観察および録音を行った。1回あたりの観察時間は平均44.8分間であり、母親の「子どもに向けた発話」の数は0～56であった。母親の発話の内容を分析した結果、【a. 子どもの様子を描写する】、【b. 子どもに問いかける】、【c. 子どもの行動や反応をよみとる】、【d. 世話行動に伴って掛け声をかける】、【e. 子どもに応答する】、【f. 子どもの行動を調整する】、【g. 子どもと双方向的に会話する】、【h. わが子の特徴について表現する】、【i. 母親の思考過程を表現する】、【j. 母親自身の感情を表出する】の10カテゴリーに分類できた。事例検討により、母親の発話の内容は、初期には母親からの一方的なコミュニケーションであるが、子どもの行動や反応をよみとり応答することや相互的なやりとりへと発展していくことが示唆された。母親の発話には個別性があり、場面の状況や母子の状態などが影響すると考えられる。また、母子関係を評価する際には、発話だけではなく、非言語的コミュニケーションと併せて観察する必要があると示唆された。今後は対象者を増やし、母親役割獲得過程との関連を検討することが課題である。

Key Words：発話，母親，産褥，授乳，母子

I. 緒 言

出産後の数日間は母子の絆形成に重要な感受期 (sensitive period)¹⁾と言われ、この時期の母親は、わが子との相互作用の経験を通して母親役割を獲得していく過程にある²⁾。授乳場面は母子相互作用を観察する良い機会であり、母親から子どもへの語りかけは、母親の子どもへの愛着や母親役割への適応を評価する上での観察の視点の一つとなると考えられる³⁾。しかし、出産後数日間の母親の発話について詳細に記述した研究は少ない。そこで、本研究は、産褥早期の授乳場面における母親の発話の内容を明らかにし、発話の数と内容の変化を検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

正期産で経膈分娩をした初産の日本人褥婦で、母子ともに健康状態に問題がなく、倫理的配慮の下に研究参加の同意が得られた者を対象とした。研究施設は2施設の産科病棟であり、施設Aは総合病院で母子同室制・自律授乳、施設Bは大学病院で母子異室制・時間授乳を基本としている。経膈分娩の場合、標準的には、産褥1日から母親による授乳が開始され、産褥5～6日に退院となる。

2. データ収集

産褥1日から退院までの昼間の授乳時に、助産師である1名の研究者が授乳室で対象者に付き添い、参加観察を行った。施設Aでは授乳室またはベッドサイドのどちらで授乳するかを母親が選択するが、本研究では観察の条件を一定にするため、授乳室を利用した場合のデータを用いた。施設A、Bともに、対象者が授乳室を訪室する時点から退室までを観察場面とした。できるだけ自然な状態

*千葉大学看護学部

*School of Nursing, Chiba University

を観察するため、対象者と看護スタッフには普段どおりに行動してもらった。研究者は意図的な介入は行わず、対象者の求めに応じて通常の看護を提供した。対象者の承諾を得て観察中の音声録音し、逐語録に書き起こした。観察の後、文脈がわかるように場面の状況や出来事、母子の状態・表情・行動などを時系列にフィールドノートに詳細に記録し、逐語録と照合した。対象者の背景要因は、自記式質問紙調査により情報を得た。データ収集期間は2002年6月～9月であった。これは、著者が先行研究⁴⁾において産褥期の母親役割獲得過程を記述するために収集したデータの一部であり、本研究では産褥早期の母親の発話に着目して再分析した。

3. 分析方法

- (1) 発話の内容：逐語録から母親の発話を抽出した。発話の単位は一文である。これを文脈から意味内容により分類し、サブカテゴリー、カテゴリーとした。次に、各カテゴリー、サブカテゴリーごとにデータに戻り、発話の内容の同質性・異質性を再度確認した。
- (2) 発話の数と内容の変化：各ケースについて、発話の数と内容の経日的変化、および、それに影響した母子の状態や背景を検討した。

観察場面で発話が全く無かったケースは「発話なし」とした。看護スタッフや他の褥婦との会話は、分析から除外した。

4. 倫理的配慮

研究の趣旨と方法、匿名性と自由意思の保証、個人情報保護、研究者が病棟スタッフと共に助産師として関わること等について、研究者が文書を用いて説明し、同意を得た。研究参加の有無に関わらず通常の看護を同等に受けることを保証し、研究者は病棟スタッフと連携して一貫して関わるように努めた。録音する際には、事前に対象者の

承諾を得た。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の概要および発話数

対象者の概要を表1に示す。10組の計27場面を分析対象とした。各ケースの観察場面は、産褥1日の初回授乳時と産褥2～6日のうち1～3回であった。1回あたりの観察時間は20～120分間であり、平均44.8分間であった(表2)。

各ケースの発話数を表2に示す。母親の発話は、その相手によって「子どもに向けた発話」と「母親の独り言」に分類された。観察場面1回あたりの「子どもに向けた発話」と「母親の独り言」の総数は0～67であった。各ケースにおける「子どもに向けた発話」数の平均(10分あたりに換算)は0～8.38であった。

2. 発話の内容

母親の発話の内容は、【a. 子どもの様子を描写する】、【b. 子どもに問いかける】、【c. 子どもの行動や反応をよみとる】、【d. 世話行動に伴って掛け声をかける】、【e. 子どもに応答する】、【f. 子どもの行動を調整する】、【g. 子どもと双方向的に会話する】、【h. わが子の特徴について表現する】、【i. 母親の思考過程を表現する】、【j. 母親自身の感情を表出する】の10カテゴリーに分類できた。カテゴリー、サブカテゴリー、発話の具体例を表3に示す。

3. 発話の数と内容の経日的変化—事例検討を通して—

母親の発話の数と内容の経日的変化と、それに影響した母子の状態や背景について、事例を用いて検討する。発話の内容のカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、発話の具体例を「 」, () 内にケース記号を示す。

ケースA, B, E, Iは、産褥1日の初回授乳

表1 対象者の概要

ケース	A	B	C	E	F	G	H	I	K	L
母親の年齢	30代前半	30代前半	20代前半	30代前半	20代後半	30代後半	30代前半	10代後半	20代後半	20代後半
出生時体重(g台)	3,100	3,000	2,900	3,400	3,300	2,800	2,400	3,300	2,500	3,400
産褥経過	np	np	np	np	マタニティブルーズ	np	np	np	合併症あり	np
栄養方法(退院時) 直接母乳の困難	母乳 np	混合 np	混合 あり	混合 あり	混合 あり	母乳 np	母乳 np	母乳 np	混合 あり	混合 np
母子同室/異室	同室	同室	同室	同室	同室→異室	同室	同室	同室	異室	異室
乳幼児の世話経験	無	無	無	あり	無	無	あり	あり	無	あり

np: 問題なし

表2 各ケースの発話数

ケース	産褥1日 [C] [M]	産褥2日 [C] [M]	産褥3日 [C] [M]	産褥4日 [C] [M]	産褥5日 [C] [M]	産褥6日 [C] [M]	平均/10分あたり [C] [M]
A	3 1 (55)	—	9 0 (30)	—	0 1 (20)	/	1.14 0.19
B	0 4 (60)	—	—	—	3 3 (30)	—	0.33 0.78
C	17 10 (60)	18 8 (30)	—	—	—	23 5 (40)	4.46 1.78
E	0 7 (50)	32 3 (60)	56 11 (75)	—	—	8 4 (35)	4.36 1.14
F	1 2 (50)	—	—	0 1 (120)	—	—	0.06 0.18
G	29 12 (45)	—	38 17 (35)	—	—	—	8.38 3.63
H	0 0 (40)	0 4 (40)	—	0 3 (25)	—	—	0 0.66
I	1 8 (40)	—	1 2 (30)	—	—	36 11 (30)	3.81 2.10
K	0 0 (35)	0 0 (43)	—	0 2 (70)	—	/	0 0.14
L	12 2 (60)	—	—	0 4 (45)	—	/	1.14 0.57

(): 観察時間 (分)

/: 退院後

[C]: 子どもに向けた発話

[M]: 母親の独り言

場面では「子どもに向けた発話」の数が少なかった(表2)。初めての抱っこに精一杯の状態で、「あっ(F,I)〈j-5. 感嘆〉と声を出したり、「ウン(A), 「よいしょ(E)」等の〈d-2. 声をかけながら世話をする〉短い掛け声や、「片目開けてる(B)」といった〈a-1. 子どものstateを描写する〉発話であった。ケースE, Iは、日数を経て「子どもに向けた発話」数が大幅に増加した。ケースIの事例では(図1), 産褥1~2日には「(おっぱいを) 飲む?」と【b. 子どもに問いかける】ことや「よし反対(側に替える)」と【d. 世話行動に伴って声をかける】単発的な発話が1回だけであったが、産褥6日には「ああ『イヤイヤ』なんだ」と【c. 子どもの行動や反応をよみとる】、「(母乳を) すぐあげるから」と【d. 子どもに応答する】、I児に乳房の吸啜を誘導し「こっちだよ」と【f. 子どもの行動を調整する】、「(ミルクが垂れてしまい) 顔についちゃった、

ごめんね」のように【g. 子どもと双方向的に会話する】が加わり、発話の数も内容も増加した。また、ケースEの事例では、乳房トラブルがあり、E児は適切に乳頭に吸着できず真っ赤になって大声で啼泣するという反応が毎回続いたため、産褥2~3日頃には母親の困難感が強くなり、「フー(疲れ)」、「もう、こっちが疲れちゃうよ」等のネガティブな【j. 母親自身の感情を表出する】内容も多く含まれていた。一方、ケースC, G, Lは、産褥1日から「子どもに向けた発話」の数が多かった(表2)。発話の内容をみると、ケースCの事例では(図1), 「吸いづらい方だったから疲れたね」等の【c. 子どもの行動や反応をよみとる】、「わかった, わかった」と【e. 子どもに応答する】、「よかったねー」のように【g. 子どもと双方向的に会話する】等の子どもとのやりとりを表す発話の割合が日数を経るごとに増加した。ケースF, H, Kは、本研究の観察場面では

表3 母親の発話の内容

カテゴリー	サブカテゴリー	例	発話の相手	件数
a. 子どもの様子を描写する	a-1 子どものStateを描写する	「寝ちゃってる」「目を開いた」	[M]	25
	a-2 子どもの表情・状態・行動・反応を描写する	「(顔が) 真っ赤になってる」「(母乳を) 吸ってる」「(げっぷが) 出た」	[M]	
b. 子どもに問いかける	b-1 子どもに要求を尋ねる	「飲む?」「いらなの?」「もう満足?」	[C]	43
	b-2 子どもに行動・反応の理由を尋ねる	「疲れちゃった?」「何でお口閉じてるの?」	[C]	
	b-3 子どもの変化を確認する	「寝ちゃった?」「止まった?」	[C]	
c. 子どもの行動や反応をよみとる	c-1 子どもの合図を解釈する	「満足しちゃったのかしら」「ああ『イヤイヤ』なんだ」「寒いのかな」	[M]	45
	c-2 子どもの行動を予測する	「もう(乳首を) 離しそうだ」「寝に入っちゃう」	[M]	
	c-3 表情・行動から子どもの感情を解釈する	「嫌(そう) な顔」「(哺乳瓶を舌で押し出して) しまう仕草に) 何, その下唇」	[C][M]	
	c-4 子どもの反応の理由を解釈する	「吸いづらい方だったから疲れたねー」「ミルクの時だけ起きようとしてるでしょ」「(空腹にならないのは) 飲みだめしたからだな」	[C][M]	
	c-5 子どもの反応の理由に疑問をもつ	「どうして(口を) 閉じちゃうの?」「(吸えば) ミルクが出ることを) わかってるはずなんだけどねー(吸わない)」	[C][M]	
	c-6 代弁する	「おいしいねー」「やっ(とおっぱい) だね」「(顔を背ける仕草に) 『やーだ』 じゃなくて」	[C]	
d. 世話行動に伴って掛け声をかける	d-1 世話行動を開始する時の掛け声	「はい, ミルクだよ」「おしり見ましょうね」	[C][M]	41
	d-2 声をかけながら世話をする	「よしよー」「ごめんね, ごめんね」	[C][M]	
e. 子どもに応答する	e-1 子どもの要求に言葉で対応する	「ちよっと待ってねー」「すぐあげるから」「まだこっち向いても吸えないよ」	[C]	12
	e-2 子どもの啼泣や発声に, 声かけで応答する	「はいはいはい」「わかった, わかった」	[C]	
	e-3 子どもの発声や行動を声で模倣する	「エュー」「アーウー」「ゴクゴク」	[C]	
	e-4 子どもの行動に, 発声で同調する	「(排気の時リズムをとって) ウンウン」「(吸啜の動作) アムアム」	[C]	
f. 子どもの行動を調整する	f-1 だだめる	「いいよ, もう泣かなくて」「そんなに怒らないの」「ああ, 真っ赤な顔になって」	[C]	102
	f-2 行動を促す	「起きて」「(哺乳を促して) 「こっちこっち」「ほら」「飲んでー」「がんばれ, がんばれ」	[C]	
g. 子どもと双方向的に会話する	g-1 誉める	「上手」「がんばったね」「おりこうさんだね」	[C]	60
	g-2 謝る	「(ミルクが顔に垂れてしまい) あっ, ごめんね」	[C]	
	g-3 愛情を表現する	「(額に触れて) ん」	[C]	
	g-4 子どもの名前を呼ぶ	「○○ちゃん」	[C]	
	g-5 あいさつする	「おはよう」	[C]	
	g-6 話しかける	「ほんと, 幸せな生活してるね」	[C]	
	g-7 子どもと喜びを共有する	「よかったねー」	[C]	
	g-8 歌を歌う	「(子どもと遊ぶように) レレレレー」	[C]	
	g-9 子どもが訴えていることを想像して会話する	「ん? あっそうなの」	[C]	
h. わが子の特徴について表現する	h-1 わが子の身体的特徴を描写する	「パパにばっかり似たね」「眉毛は濃いし, 女の子なのに男前になっちゃう」	[M]	8
	h-2 わが子の行動・反応の特徴を受けとめる	「おこりんぼさんだもんね, 君ね」「(おむつを) 開けられたくない派なんだよね」	[C]	
i. 母親の思考過程を表現する	i-1 世話行動の思考過程と判断を口に出す	「もうちよっと奥に, でも大丈夫か」「(時計を見て) そろそろかな」「(授乳量は) さっき〇gで, これにちよっと足せば…」	[M]	22
	i-2 世話行動の判断を子どもに確認する	「十分(母乳だけで) 吸えちゃうね」「じゃあ大丈夫かな」	[C]	
j. 母親自身の感情を表出する	j-1 笑い・微笑	「フフフ」「クスッ」	[C][M]	93
	j-2 ため息	「フー(疲れ)」「もう(苛立ち)」	[M]	
	j-3 驚き	「(吸啜が) うお, 速い, 速い」「(力の強さに) すごい」	[M]	
	j-4 安堵	「(うまくいって) よかった」「はあ(安堵)」	[M]	
	j-5 感嘆	「(失敗しそうになり) おっと」「あっ!(気づく)」「(失敗して) ワー!」	[M]	
	j-6 母親の感覚を表現する	「痛い」「暑い」	[M]	
	j-7 母親の気持ちを子どもに言う	「(やっ(と)上手くいって) よかった(ね)」「(授乳がうまくいかず) もう, こっちが疲れちゃうよ」	[C]	
	j-8 母親の要望を子どもに言う	「(なかなか乳首に吸着せず) いいから早くしてよ」「お母さんにもお昼ご飯食べさせてよ」「(体重増加が少なめのため) 退院するまでにさ, 大きくなって」	[C]	
発話なし				

()内は注釈
 発話の相手: [C] は子どもに向けた発話, [M] は母親の独り言
 件数: 全ケースから抽出された発話の数

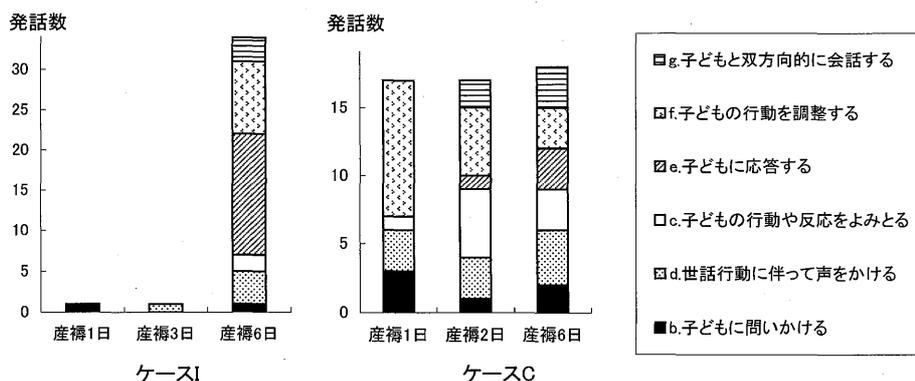


図1 子どもに向けた発話の数と内容の変化 (ケース I と C)

〔子どもに向けた発話〕がほとんど無かった (表 2)。ケース F は産褥 5 日にマタニティブルーズ症状が出現し、ケース K は子どもへの接し方にどこちなさが残り、看護上の問題が査定された事例である。その一方で、ケース H のように、発話は無くても、タッチやアイコンタクト等の子どもとの非言語的なコミュニケーションが良好な事例もあった。ケース A, E, L は、産褥 4～6 日に〔子どもに向けた発話〕の数がそれ以前よりも少なくなった (表 2)。それは、退院日であり迎への家族が待っている状況 (A, E) や退院指導の時刻が迫っている (L) ために、母親がいつもより短い時間で授乳を終了したためであった。

IV. 考 察

1. 母親の発話について

母親の発話の内容は、産褥 1 日頃には【a. 子どもの様子を描写する】ことや、子どもを会話の相手と意識せず単純に【d. 世話行動に伴って掛け声をかける】といった一方向的なコミュニケーションである場合が多かった。次第に、【b. 子どもに問いかける】、【e. 子どもに回答する】、【f. 子どもの行動を調整する】という相互的なやりとりへと発展していくことが、母親の発話の内容からも示唆された。【c. 子どもの行動や反応をよみとる】には、子どもの合図の解釈と代弁が含まれる。代弁は、母親が子どもの行動や子どもの気持ちを解釈した上で選ばれた発話⁷⁾であり、母親が子どもの合図をよみとっているかをアセスメントする際の観察の視点⁸⁾になると考えられる。ケース I と C の事例では、【g. 子どもと双方向的に会話する】という相互的コミュニケーションへの発達⁹⁾が認められた。ケース C のように発話数は一定でも内容が変化していく場合があり、母親の発話を観察する際には、発話の有無だけでなく、その内容にも着目すべきであろう。

本研究のデータは授乳場面の観察であることから、発話の内容も、子どもの哺乳や授乳行動に関連したものが多かった。産褥早期および新生児期には母子の状態の変化が著しく、哺乳量や授乳方法、所要時間が日々変化する。また、各ケースの〔子どもに向けた発話〕の数は個人差があり (表 2)、場面の状況によっても違っていた。本研究の対象者は初産の母親であり、産褥 1 日の初回授乳場面では、抱っこや授乳の手技を学ぶのに精一杯で子どもに語りかける余裕がないというケースが多かった。また、母親は新生児を「まだ目が見えていない」と誤解し、「寝てばかりいる」ためコミュニケーション不能な相手とみている場合がある⁴⁾。出産直後の母子初回対面時における母親の行動を調べた野村らの研究⁵⁾によると、語りかけ行動は、新生児が覚醒状態の場合に有意に多く認められている。このような場面での母親の発話には、その時の子どもの状態や反応、それに対する母親の認識が影響すると考えられる。また、退院前に〔子どもに向けた発話〕の数が少なくなったケースもあるが、これは母親がスケジュールの都合により授乳を短時間で終わらせようとして、子どもとのコミュニケーションの時間が取れない状況であったことが一因であろう。また、授乳場面の観察では「授乳がうまくいっているか」を考慮する必要があるだろう。直接母乳の困難感が強かったケース E の事例では、〔子どもに向けた発話〕の数が多反面、母親自身のネガティブな感情の表出も観察された。〔母親の独り言〕を分析対象に含めたのは、子どもの合図をよみとり要求に回答する際の母親の思考と判断の過程や、それに伴う感情が表出されていたからである。授乳場面は個別の看護を提供する良い機会であり、母親の思考過程や感情表出をとらえ、母親役割獲得を促す看護につなげることが重要であろう。

〔子どもに向けた発話〕がほとんど無いという

ケースが3例あった。その後、ケースFはマタニティブルーズになり、ケースKは子どもとの接し方に課題が査定された。先行研究⁹⁾では、産後6か月のうつの母親は、子どもに向けた発話の数が少ないと報告されている。母親の発話は、産褥期の母親の適応をアセスメントするための視点の一つとしても意味があるのではないと思われる。その一方で、ケースHのように、発話は無くて子どもとのコミュニケーションが良好な事例もあり、母子関係を評価する際には、発話だけでなく、非言語的コミュニケーションと併せて観察することが必要であると示唆された。

2. 今後の研究課題

産褥早期の授乳場面の観察において、「語りかけ」は、母親の子どもへの愛着形成³⁾や母子相互作用の評価⁹⁾の項目となっている。本研究では、母親の発話の内容を分類し、事例の経過に照らして検討した。母親役割獲得過程をアセスメントするには、発話の有無だけでなく、その内容や変化にも着目すべきであろう。また、母子の状態や個別性、場面の状況を考慮する必要がある。母親の新生児に対する語りかけ行動は経産婦の方が初産婦よりも多い傾向が報告されており⁵⁾、今後は初産の母親の特徴を明らかにすることや、過去に乳幼児と接触した経験の有無や授乳方法などの背景要因との関連を検討することも有用であろう。また、Todaらの研究⁹⁾によると、日本人と米国人とでは母親の子どもに向けた発話の使い方が異なっており、文化的なコミュニケーション様式や価値観が反映されることが示唆されている。今後は対象者数を増やし、母親の発話と母親役割獲得過程との関連を検討することが課題である。

謝 辞

ご協力くださいました対象者の皆様、研究施設の看護スタッフの皆様に感謝致します。

引用文献

- 1) M.H. クラウス, J.H. ケネル, P.H. クラウス (著), 竹内徹 (訳): 親と子のきずなはどうつくられるか. 医学書院, 67-114, 2001.
- 2) 前原邦江: 産褥期の母親役割獲得過程—母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス—. 日本母性看護学会誌, 5 (1), 31-37, 2005.
- 3) 前原邦江: 産褥早期における母親役割行動の観察指標の作成—授乳場面の観察とアセスメントから—. 平成16年度千葉大学21世紀COEプログラム拠点報告書, 97-100, 2005.
- 4) 前原邦江: 産褥期の母親役割獲得過程を促進する看護に関する研究—母子相互作用に焦点をあてた看護介入の効果—. 千葉大学大学院看護学研究科博士論文, 5-27, 2003年度.
- 5) 野村紀子, 小口徹, 新開淑子: 出産直後の母親が児に示す接触行動および語りかけ行動の検討. 小児保健研究, 60(3), 391-399, 2001.
- 6) Eisquel Herrera, Nadja Reissland, John Shepherd: Maternal touch and child-directed speech: effects of depressed mood in the postnatal period. Journal of Affective Disorders, 81, 29-39, 2004.
- 7) 岡本依子: 母子コミュニケーションにおける母親による子どもの代弁: 1歳児への代弁の分類. 東京都立大学人文学報, 307, 73-94, 2000.
- 8) 香取洋子, 高橋真理: 産褥早期母子相互作用の評価スケールAMIS日本語版の信頼性・妥当性に関する検討. 日本母性看護学会誌, 4 (1), 1-6, 2004.
- 9) Sueko Toda, Alan Fogel, Masato Kawai: Maternal speech to three-month-old infants in the United States and Japan. Journal of child language, 17, 279-294, 1990.